

知多半島ケーブルネットワークコミュニティ誌 [ココナッツクラブ]

COCONUTS CLUB

July 7
2022

いっ
ちよう
だ
壱町田湿地に夏が来る



夏 が 来 る

壱町田湿地に



前号の特集では、壱町田湿地が描かれた武豊六貫山郵便局の風景印を取り上げた。毎年恒例の一般公開を控えた今号は、壱町田湿地の全貌と保存の歩みを紹介する。これを読んだらぜひ現地へ出掛けて、貴重な植物の数々をその目で見てほしい。

町からこんな近いところに、
貴重な植物の楽園がある。



あなたの知らない湿地の世界

武豊町の北のはずれ、丘陵地に広がる田畑の中に、こんもりとした小さな森がある。ごくありふれた普通の雑木林のように思えるが、実はここは知多半島の自然を語るときに外すことのできない場所だ。

その名は「老町田湿地」。貴重な湿地植物が多く生育していることから「老町田湿地植物群落」として愛知県の天然記念物に指定されている場所である。通常は許可のない立ち入りは禁止、年に五日しか公開されていないので、その名は聞いたことがあっても訪れたことがないという人は多いのではないだろうか。いったいどのような場所なのか、さっそくご案内しよう。

一万一〇〇〇㎡の面積を有する老町田湿地保護区には、西側に設けられた入口から入る。鬱蒼と生い茂る木々の中に入ると、すぐに小さな広場がある。一般公開のときにはここがビジターセンターとなり、当日採取したサンプルや生き物の標本などが展示されるので、まず

立ち止まり、時間をかけてじっくり観察していく。それはきつと、宝探しのようにはわくわくするひとときになるだろう。

老町田湿地を代表するのは、七種類の食虫植物である。その中のひとつシロバナナガバノイシモチソウは、モウセンゴケ科に属する植物で、国内に自生地は極めて少ない。漢字で書くと「白花長葉の石持草」。細長い茎から伸びる細い葉には腺毛がびっしりで、その先端に球状の粘液が付いているのが特徴。水滴のようにキラキラした粘液と、清楚な純白の花とが相まって、なんとも清々しい。しかし、この粘液が曲者である。虫が触れるとくっついて逃れられなくなり、細い葉が虫を取り込むようにしなる。そこに消化液を分泌して、動けない虫から栄養を吸収するのだ。

モウセンゴケ科の植物ではこのほかに、モウセンゴケとトウカイコモウセンゴケが見られる。漢字表記だと毛氈苔で、トウカイを冠する種はその名のとおり東海地方のみに分布する種類。ひよろりとした茎の先

は軽く予習をしたい。

その先から、敷地内を一方通行で一周する観察路が始まる。案内に従って時計回りに進むと、程なくして森の中にぽっかりと空いた日当たりのよい空間が現れる。左手は広くて平たい「A湿地」。右手は少し狭い傾斜地の「C湿地」。この二つの湿地の先で小さな沢を渡り、いったん木立の中に入ることが通り返り抜け、A湿地より三倍ほど広い「B湿地」が広がる。A湿地とB湿地がこの要部で、観察路には数個の単眼鏡が設置されている。湿地植物は小さいものが多く、素人目には判別しづらいので、拡大して観察してもらおうという趣向だ。

B湿地の先で分岐する枝道に足を向けると、敷地南端の「D湿地」に至る。ここからはフェンスの外側の田んぼが見え、一瞬、現実世界に引き戻されたような気分。観察路はここで行き止まりなので引き返し、元のルートに戻って坂を登ると、出発地点の広場に戻る。ただ歩くだけなら一周数分で終わってしまうが、たいていの人はポイントごとに

端に、前者は白の、後者は淡い赤紫色の可憐な花を咲かせる。

そして、タヌキモ科に属するミミカキグサの仲間が四種。漢字は「耳搔草」で、結実した姿が耳かきに似ていることが名前の由来だ。この植物は非常に小さく、中でもヒメミミカキグサは茎の長さが一〜二センチ、花の大きさは一〜二ミリしかない。観察路の単眼鏡を覗かなければ見つけることはまずできない。

食虫植物以外でぜひ見ておきたいのは、九月に見頃を迎えるシラタマホシクサ(白玉星草)。まっすぐ伸びる細い茎の先端に白い玉のような花を付け、湿地の一面に咲く様は星空さながらだ。

貴重な湿地を保存せよ！

かつてのここは、特別視されるようなこともなく、地元の人々が薪拾いに行く程度だった。それが貴重な場所として認識されるきっかけをつくったのは一人の高校生である。

時は昭和四十一年(一九六六)。半田高校三年生で生物部に所属し



ていた杉田春一さんが、文化祭でシラタマホシクサやモウセンゴケを展示しようとして志町田へ採集に訪れた。杉田さんは子供の頃からこのあたりの野山でよく遊んでおり、雑木林の中はじめじめしたところにそれらが自生することを知っていたのだ。そのとき採集した見慣れない植物を地元の研究者に見せたところ、知多半島一帯からは消滅したと思われるナガバノイシモチソウであることが判明する。これが中日新聞知多版に掲載され、いつとき話題になった。

その後、大きな動きはなかったが、十年近くが過ぎた昭和五十年代の始め頃、再び注目される。武豊町北部一帯で大規模な県営農業基盤整備事業が実施されることになり、そこに志町田も含まれることを知った人々が湿地植物保全の道を探り始めたのだ。その道筋を付けたのは、当時の町長の山本孝夫さんと、役場職員だった鈴木樹雄さん。二人とも植物に興味があったので、役場の業務とは関係なく志町田の植物を独自に調べており、開発の話

が浮上したとき、なんとか湿地を守りたいと意見が一致する。そこで昭和五十四年(一九七九)、山本さんの指示のもと鈴木さんを中心とした職員六人から成るプロジェクトチームが編成され、秘かに調査をスタートさせた。秘かに進めたのは、開発が絡む話なので無用な騒ぎを引き起こさないよう、また、方向性が定まる前に山野草愛好家やアマチュア研究者などに荒らされてしまわないよう、細心の注意が必要とされたからである。

当初は、ナガバノイシモチソウを町内外の別の湿地に移植することを試みたが、これがごとごとく失敗する。チームのメンバーは「やはり自生地でない」と生育は難しい」と再認識し、移植ではなく現在地で保存する方向に舵を切った。各方面への働きかけも功を奏し、昭和五十六年(一九八一)一月には県の会議において開発地域の一部を緑地保護区とすることがとりあえず決定する。しかし最初の段階では、小さな保護区が何箇所かに点在するという形が想定されていた。

範囲が拡大されたのは、その年の四月から調査に加わった和田基巳さんの提言によるところが大きい。和田さんはもと東京大学北海道演習林の研究者で、植物研究のエキスパート。プロジェクトチームを率いる鈴木さんは、湿地まわりの約一〇〇〇㎡を保存できればいいだろうと考えていたのだが、和田さんは「ただそれだけでは植物は守れない。その十倍以上は残さないとだめだ」と主張。これを受けて二万一〇〇〇㎡の区域を一括で残すという町の方針が定まった。

昭和五十八年(一九八三)、町は予算を確保してフェンスや仮設の観察路を設置するなどして保護を押し進める。さらに翌五十九年(一九八四)には湿地一帯を町で買い上げ、県の天然記念物指定にまで漕ぎつけた。こうして志町田湿地は、恒久的に守られることが確約されたのである。

この場所はみんなで守る

その年の夏、初めての一般公開が



守ってきたこの場所を、
未来に繋げるためにできることは。

令和4年一般公開日：7/24(日)、8/6(土)、8/7(日)、9/17(土)、9/18(日)
問い合わせ：武豊町歴史民俗資料館 0569-73-4100

たそうで、大きく育ちすぎた木を許可を得た上で適切に伐採して世代交代を図り、昔の里山に戻そうという計画も進めているとか。ちなみにP.03の写真は、伐採した枝を活用したプレゼント用の置物である。さらに、土地の水分調整も欠かせない。周辺環境の影響もあって土地がやや乾燥気味で、年によっては早魃かんぼつに近い状態になることもあるので、湿地内の沢の水をポンプで汲み上げ湿地に補水している。

例えば、阿久比町の板山高根湿地では多くが生息しているというから不思議だ。なぜいなくなったのか。今後再び現れることはないのか。この答えを出すには、観察と保護活動を長期間にわたって地道に続ける以外に道はないだろう。

そのためには活動の継続が課題だが、幸いなことに若い世代の関心は高いようである。会では平成十二年(二〇〇〇)から町内の小・中学校からボランティアを受け入れているが、毎年一定数の参加者があり、今年も五十六人が登録している。草刈りや枝切りをしてもらうだけでなく、知識が深まるよう観察指導にも力を入れ、一般公開日の受付は中学生が担当する。今年度は小学五年生の女子児童が会の正式メンバーとして母親と一緒に参加しているというから頼もしい。

「自然とふれあうことで人間は優しくなれる、ということ伝えたいですね」と話す島さん。武豊町湿地という唯一無二の教材は、多くの人の手によっていつまでも受け継がれていくだろう。